海外の話題

中港矛盾 - 香港から白い粉を持ち出す運び屋にジャッキー・チェンは鉄槌を下せるのか？

農林中央金庫　香港駐在員事務所長　田辺　徹也

春節の入出境検問所にマカオ好きな本土人が殺到

「世の中には２種類の人間がいる。マカオが好きな奴とそうでもない奴だ。」と言っているのは世界中で筆者だけなのだが、博才の無い筆者自身は「そうでもない奴」である。一方、ギャンブル好きで知られる中国人では「好きな奴」がかなりの割合を占めるものと想像するが、今年の春節（旧正月）連休には入出境者のあまりの多さに広東省珠海市とマカオの間にある入出境検問所の処理が追いつかず、千人近くが数時間も待たされる事態が発生した。中国人が如何にギャンブルを好きかについての説明はまた改めるとして、ここで言いたいのは、①中国本土人がマカオ（香港も含む）に行くには、同じ中国でありながら、入境検問所でパスポートを提示して入境ビザの審査や、税関検査、検疫を受けなければならないということ、②検問所が麻痺するほどの本土人が入出境していること、の2点である。

火薬以来の大発明「一国二制度」のおさらい

どうして検問があるのかと言えば、1997 年に英国から返還された香港および 1999 年にポルトガルから返還されたマカオでは、ご案内の通り、「一国二制度」が返還から 50 年間適用されているからである。「一国二制度」とは読んで字のごとく、一つの国の中で二つの制度が並行して適用されることであり、中国の中でも「特別行政区」である香港とマカオについては、社会主義国の一部でありながら、堂々と資本主義がまかり通っているのである。法制や税制も本土とは異なり、所謂「一人っ子政策」の適用や、言論や情報の統制もない。日本人では思いつかないような大胆な発想で、火薬が古代中国の世界に誇る発明だとしたら、「一国二制度」は鄧小平時代の大発明であると言われている。なお、カジノや通貨をはじめとして香港とマカオの制度も互いに異なることから、現在の中国は厳密にいうと「一国三制度」である。

「運び屋」が持ち出す「白い粉」

その「一国二制度」にかかる最近の大きなトピックスと言えば「運び屋問題」である。往年の香港映画では、「運び屋」と言えば、「すわ麻薬か！？」ということになるのだが、同じ白い粉でも今話題となっているのは、「粉ミルク」である。メラミン混入事件以降、安全な粉ミルクを求めて、中国本土人が大挙して買い出しに来ることが話題になったが、最近では「運び屋」と呼ばれるプロが本土から入境し、本土内で転売するため大量の粉ミルクを買い占めて持ち出しているのである。そのため、香港内の粉ミルクが不足する事態に至ったため、今年の3月から、香港外への粉ミルクの持ち出しが一人当たり2缶＝ 1.8kg に制限されることとなった。また、「運び屋」のターゲットは当然粉ミルク以外の品目にも及んでおり、ボーダー近くの街で買った大量のモノを列車に持ち込んで運ぶため、地元の住民や地下鉄の乗客とトラブルが絶えず、出境検問所につながる地下鉄東鉄線への手荷物の持込みを一人当たり 23kg までとする、飛行場並みの規制も始まった。

「中港矛盾」

こうした本土と香港との対立や軋轢のことを「中港矛盾」と呼ぶのだそうだ（もちろん中は中国、港は香港のことで、マカオの話題から始めた原稿なのに「中港」なのは筆者の矛盾である）。返還当初は「一国二制度」の下、本土人の流入には観光旅行ですら厳しい制限が設けられていて、こうした「矛盾」はあまり顕在化していなかったのだが、SARS による経済的疲弊を救済する意味合いもあり、2003 年に香港およびマカオへの本土人の個人旅行が解禁された。以来、入境のハードルは段々と低くなり、また本土

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます

側の急速な経済成長もあって、最近では香港を訪れる本土旅行客の年間のべ人数は約 3 千万人を越え、香港の全人口の 5 倍近くにも達しており、「矛盾」が起こり易い環境を生み出している。

「中港矛盾」が大きく取り沙汰されるようになったのは、本土人の妊婦が子供の香港永住権目当てに香港で出産する、一昨年の「越境出産」騒動の当たりからだと思う。越境出産が数万件のレベルに達したため、病院が満杯となり、香港人が出産できなくなったのである。その頃から、禁止されている地下鉄車内での飲食を本土人が行っていたため注意したら逆ギレされた事件、香港人があるブランドショップの写真を撮ろうとしたら警備員から「本土人以外は撮影するな」と言われ翌日から多くの香港人による当該ブランドへの抗議デモが巻き起こった事件、本土富裕層による香港不動産の投機的売買に伴う住宅価格の高騰、有名大学教授による「香港人は犬」発言等々、大小のトラブルが次々と発生した（当然ながらネットの普及がトラブルの拡大に拍車を掛けている）。

そして極め付きは昨年の夏から秋にかけて起こった「道徳・国民教育」科目の小学校への導入反対運動で、当該科目は中国共産党を礼讃する内容とされ、学生や教育関係者を中心に運動が巻き起こった。ピーク時には一般市民も含め数万人が抗議活動に参加したと言われ、発足したばかりの梁振英政権が、日本でいう国政選挙にあたる立法会選挙の前日に導入を事実上撤回するという事態に陥った。

ジャッキー・チェンは「プロジェクト A」、ドナルド・ツァンは「プロジェクト 10」

さて、出口の見えない「中港矛盾」、ここは一つヒーローにでも登場してもらってスカッと解決してもらいたいところだ。香港を代表するヒーローの筆頭といえばジャッキー・チェンであることは疑いがないが、残念ながら彼は先ごろ本格アクション映画からの引退を宣言した。ジャッキーと言えば、今年 3 月の全国人民代表大会に並行して開かれた全国政治協商会議の委員として当該会議に出席したことが日本でもニュースになったと思うが、実は近年の彼は北京政府寄りの発言が多いことで有名で、発言のたびに物議を醸す存在となっており、その点に関しては香港の人々から必ずしも好感を持って迎えられていないのが実情である。ある意味で「中港矛盾」を象徴する人物であり、本稿副題の「運び屋に鉄槌を下せるか？」との質問への回答は恐らく「No」である。

ところで彼の最高傑作は、運び屋ならぬ海賊と香港水上警察官のジャッキーが戦う「プロジェクト A」だと言われているが、昨年当地の行政長官を退任したドナルド・ツァンがぶちあげたのが「香港 10 大インフラプロジェクト」、いわば「プロジェクト 10」である。10 大プロジェクトの大半を交通インフラの整備が占めており、中でも目玉は、現在お隣の広東省まで開通している高速鉄道の延伸と、香港～マカオ～珠海を結ぶ大橋（多くの部分は海底トンネルだそうだが）の建設で、いずれも既に着工済みで前者は 2015 年、後者は 2016 年に完成の予定だそうだ。こうした新たなインフラが本土に繋がれば、当然更なる矛盾が発生するリスクが高まる訳であり、喜んでばかりいられない。一方で広東省における交通インフラの整備も急速に進んでおり、現に冒頭に記したマカオの検問所のトラブルは、珠海側で鉄道が開通し当該検問所へのアクセスが容易になったためらしい。

それにしても、マカオにかかる大橋や広州に向かう高速鉄道でのジャッキー・チェンのアクションを観てみたかったものだが、ジャッキーも完成した橋を見れば得意の転落アクションに挑戦してみたくなるのではなかろうか。「酔拳」や「蛇拳」などの初期の作品では酒や蛇といったネガティブなパワーを武器に転化させたジャッキー、深刻化する中港関係に終止符を打つには、矛盾をプラスに転化させる映画「矛盾拳」の製作しかない（矛盾を起点とする点では毛沢東の「矛盾論」からも外れてないし…）。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます